

平成28年度病院医学教育研究助成成果報告書

報告年月日：平成29年 4月 5日

研究・研修課題名	箱庭療法学会第30回大会・ワークショップ
研究・研修組織名（所属）	精神科神経科
研究・研修責任者名（所属）	高野 由美子
共同研究・研修者名（所属）	高野 由美子 佐々布亜希子 三成 綾

目的及び方法、成果の内容

①目 的（800字程度）

箱庭療法とは、砂の入った箱の中に自分が置きたい玩具を並べていくことで言語化できない心の深層を表現していこうとするものであり、1929年にイギリスのマーガレット・ローエンフェルドによって考案され、その後スイスのドーラ・M・カルフ氏によってユング心理学を基盤にして心理療法に用いられる形に確立された。このような非言語的な表現方法は、心の中にある、言葉では表せないような曖昧な気持ちや心のより深層にあるため言葉にはできない心の動きを、視覚可能な形で表現することができるため、深い部分での心の動きを捉えることができる。また心の中のことを表現することによる心理的な治癒効果が認められるなど、子どもだけでなく大人に対しても広く用いることができる有効な療法である。このような非言語的療法は箱庭療法だけでなく、描画法など様々な有効な療法があり、日頃の治療にも頻繁に用いられている。しかし箱庭や絵で表現された作品をどのように解釈していくのかは非常に難しいところであり、継続的に箱庭療法やユング心理学について学んでいくことが重要である。箱庭療法学会では箱庭のみならず、描画を用いた心理療法についての事例や研究も多いため、本研修に参加することにより、箱庭療法や描画療法について多様な知識を身につけることができ、より適切に、効果的に治療に用いることを可能にする。

②方 法（800字程度）

平成28年10月15日・16日に開催された箱庭療法学会第30回大会・ワークショップに参加し、箱庭療法やユング心理学についての知識や技術についての理解を深めた。

10月15日午前に行われたワークショップは『箱庭療法と日本的主体』（講師：田中康裕先生：京都大学）と『風景構成法における、メタ境界としての「枠」と「連山」』（講師：川寄克哲先生：学習院大学）に参加した。ワークショップは、時間の前半で講師の先生による、箱庭療法や風景構成法について、主体性とは何か、発達障害との関連についてなどの講義が行われ、後半では発表者による実際の事例の発表が行われ、その後事例についてのディスカッションが行われる、という内容であった。午後からは公開シンポジウム『古い絵に見る日本人の心』に参加した。最初の基調講演は画家の山口晃氏による講演が行われた。山口氏は画家であり現代美術家としてこれまでに多くの作品を発表されており、また独特の視点から中世の日本画について解釈した著述も多数ある。今回は著述の一つである『へんな日本美術史』から箱庭療法との関連で講演が行われた。講演後は、シンポジストの岩宮恵子先生（島根大学）と田中康裕先生（京都大学）が登壇され、心理的視点からの日本画の解釈や描画療法との関連などについて興味深い議論を聞くことができた。

10月16日午前は大会30回記念シンポジウム『事例から見る箱庭療法の30年』に参加した。今回は大会が30回という節目に当たることもあり、日本に箱庭療法が紹介された当時の箱庭療法の事例の発表と、最近多い症例についての箱庭療法の事例との対比で進められたシンポジウムであった。同じ療法での新旧の事例の発表を同時に聞くことができ、時代による内面の変化が顕著な部分と、時代によっても変わらない部分があることが感じられるシンポジウムであった。午後は事例を中心とした様々な研究発表などに参加し、箱庭療法についての最新の知識や新たな可能性について認識を深めた。

③成 果 (データ等の図表を入れて2000字程度)

- ・箱庭療法以外にも、描画等の非言語的手法による多数の心理療法の事例にふれることで実際の治療においてそれぞれの患者の傾向に合わせた非言語的心理療法を用いることが可能になった。
- ・心理療法における目標の一つとして、主体性の形成、ということが挙げられる。しかし、実際には主体性形成のためには長い時間をかけることが必要である。また主体性形成における、心の成り立ち方について治療者が多くの知見を得ていることも重要となる。そのようなことから今回のワークショップにおいて、主体性について、日本人における主体性の成り立ちやあり方など、様々な主体性についての知識や実際の事例の詳細を聞くことで、新たな知識を得ることができ、主体性形成についての考え方について、新たな視点を得ることができた。
- ・風景構成法をテーマとしたワークショップに参加したことにより、様々な風景構成法の表現に触れる機会を得るとともに、同技法の新たな知見を得ることができ、今後の臨床業務で用いる意義について理解を深めることができた。
- ・公開シンポジウムに参加し、日本画における構図の見方や構図の中に現れる当時の日本人の心の構造についての解説などを聞くことで、箱庭療法で表現された作品の解釈について新たな視点を得た。
- ・記念シンポジウムでは、箱庭療法が日本に導入された当時の箱庭療法の様子を発表後、最近実施された箱庭療法の様子の発表があり、日本における箱庭療法の変遷や、患者像やその病態の移り変わりなどについても新たな視点を得、理解を深めることができた。
- ・事例発表では「娘の不登校で来談した母親との面接」についての事例発表に参加した。娘の不登校を主訴に来談した40代のクライアントは、心理面接で娘との関係を語るなかで自分の母親との関係について、また、これまでの自身のあり方について思いをめぐらせるようになった。子どもの問題をきっかけに心理療法へつながる方も多いが、その際、親としての語りだけでなく、その方自身の語りへとシフトすることもある。家族をめぐる問題に対する心理療法的アプローチとして重要な視点を得ることができた。
- ・非言語的表現手段である箱庭療法について学ぶことで、言語的な表現力にまだ乏しい子どもや、様々な理由で気持ちを言語で表現できにくくなっている大人の患者に対しての有効な手段として箱庭療法を用いることができるようになり、様々な状態の患者へのアプローチの方法が拡大された。
- ・表現された箱庭作品について、より多くの解釈の方法や視点を得ることができ、実際の治療において箱庭作品からの心理的な理解をさらに深めることができるようになった。